

「魅力ある大学院教育」イニシアティブ 「生活環境の課題発見・解決型女性研究者養成」への期待

久米健次

奈良女子大学学長



我国の大学における学部教育は教育目標を定め、体系的なカリキュラムが編成され、組織的な教育が進められてきました。一方、大学院における教育は、それぞれの研究室における研究活動に大学院生が何らかの形で参加するなどにより行われてきた場合が多かったように思います。このような大学院教育をより組織的に行うことで実質化を図り、かつ国際的な通用性・信頼性の向上を図ろうというのが、「新時代の大学院教育－国際的に魅力ある大学院教育の構築に向けて－」（平成17年9月5日中央教育審議会答申）の答申内容であり、「魅力ある大学院教育イニシアティブ」は、この提言を踏まえて実施される事業です。このたび採択された「生活環境の課題発見・解決型女性研究者養成プログラム」では、上記のような方向性に則って生活環境関連分野での大学院生が、様々なプログラムに能動的に参加することで、各フィールドでの活動の中から課題を発見し、その課題を解決するための方法を学べるように企画されています。研究活動は課題発見、それに続く専門的な方法論に基づく調査分析があり最後に研究成果をとりまとめるという一連の作業サイクルの連鎖から成っています。このプログラムに参加し育った女性研究者の方々が、現場の中で培った研究力を発揮して社会の各方面で活躍されることを大いに期待しています。

「魅力ある大学院教育」イニシアティブ 「生活環境の課題発見・解決型女性研究者養成」に採択されて

今井範子

取組実施担当責任者・社会生活環境学専攻教授



昨年10月下旬に採択結果が発表されてから、新しい教育プログラムの展開にむけて、イニシアティブ関連専攻では、院生と教員の精力的な諸活動が開始されました。例えば、学生自らがセミナーを企画する「自主企画研究セミナー」、学生と教員が協働参加するFD活動等々が始動しています。

平成18年度以降の本格稼働に際し、本教育プログラム推進委員会の中に、カリキュラム、プロセス管理、自主活動支援、FD、評価、広報の6つの部会をおき、自主的で創造的な女性研究者の養成を目指す教育プログラムの推進と改善の仕組みに関する議論が、種々重ねられてきています。

さらに、新教育プログラムを円滑に推進し、学生、教員の教育研究活動を支援していくための大学院教育推進支援室が、全国の大学院に先駆けて研究科内に設けられました。

人文科学、社会科学、工学を融合した本専攻では、学位取得にむけて、学修課題を複数の科目等を通して体系的に履修するコースワークによって、基礎となる豊かな学識、専門応用力を培います。さらに、研究キャリア・サポート科目として、研究マネジメント群とキャリア形成群を配置したことが大きな特徴であり、研究者、大学教員としての資質も培い、コースワークの教育効果が期待されます。

われわれを取り巻く生活環境を多面的にとらえ、その中にある課題を自ら鋭敏につかみとり、その課題を解決していく、現代社会が希求する女性研究者の育成を目指します。



「魅力ある大学院教育」
イニシアティブ
に
本学が
選定されました

「魅力ある大学院教育」イニシアティブは、文部科学省が、現代社会の新たなニーズに応えられる創造性豊かな若手研究者の養成を行う大学に重点的に支援を行う事業です。本学から申請した「生活環境の課題発見・解決型女性研究者養成」のための教育プログラムがこれに選定されました。

本プログラムの対象となるのは、以下の専攻です。

博士前期課程 国際社会文化学専攻、人間行動科学専攻、人間環境学専攻

博士後期課程 社会生活環境学専攻

これらの専攻では、生活の場であるフィールドの中から、生活環境に関わる課題を発見し、その課題を解決できる創造性豊かで自立した女性研究者を養成していきます。このために、平成18年度入学者から、新たな教育プログラムが本格的に実施されます。

新たな取り組みの特色は、以下の2点です。

1. 新たな教育カリキュラム

修士論文や博士論文の作成に向けて、コースワークを充実させました。従来は、専門科目のみを提供してきましたが、来年度からは、[専門基礎群]、[専門応用群]、[論文作成] からバランスよく科目を選択して学べるようになります。さらに研究者養成をめざす人のために、[研究マネジメント群] と [キャリア形成群] を新たに設けました。[研究マネジメント群] では、研究を主体的に企画・運営・遂行する能力を、[キャリア形成群] では、女性のキャリア形成に必要な実践的な能力を育成します。

2. 大学院生の自主的な研究活動の支援

研究セミナーの開催や調査活動、研究成果の公表などにさまざまな支援を行い、自立した若手研究者をめざす大学院生の研究活動を積極的に支援します。

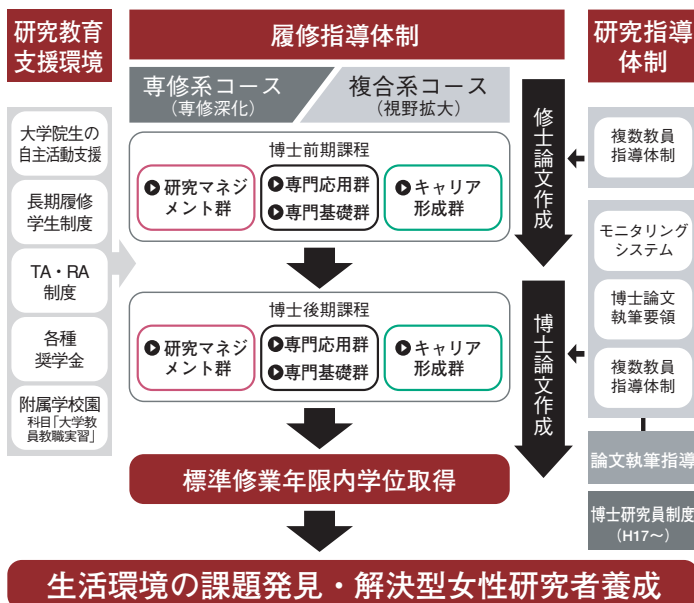


図1 教育プログラムの全体像

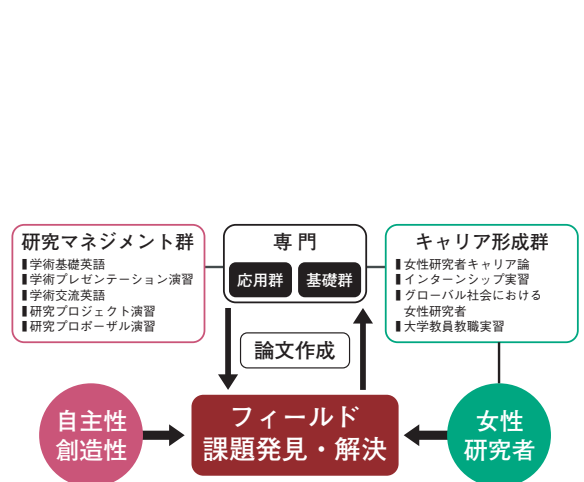


図2 コースワークを重視した教育課程

大学院教育に思う 国際学会参加のススメ – サポート科目への期待 –



藤原素子

社会生活環境学専攻人間行動科学講座教授

今回のイニシアティブにおいては、従来の授業科目に加えて、新たに研究者生活をサポートする「サポート科目群」として、研究マネジメント科目群（学術英語、研究プレゼンテーション、研究プロジェクトなど）とキャリア形成科目群（女性研究者キャリア論、大学教員教職実習など）が開設されました。

私自身は、本学文学研究科修了後、博士後期課程は大阪大学医学研究科に進み、温熱生理学の研究に従事しました。その間非常に印象深かったのは、国際学会に参加したことでした。初めて参加したのは、カナダのカルガリーで開催された国際生理学会で、そのときには発表は行ないませんでしたが、国内学会にはない国際学会独特の雰囲気を味わい、自分もいつか発表したいと強く思いました。そして2年後、ノルウェーのトロムソで開催された国際生理学会でデビューを果たし、その発表がきっかけで、短期ではありましたがデンマークの温熱生理学研究所で共同研究をする機会に恵まれました。また、国際学会の醍醐味は研究だけでなく、その国の自然、文化を体験することにあります。私自身、カナダではロッキー山脈の雄大な自然の中を旅し、ノルウェーでは白夜の町で自分の将来の夢を描きました。

「サポート科目群」が、若い女性研究者達のグローバルな視野の拡大と、国際学会への積極的な参加のきっかけになることを大いに期待しています。

私の修士論文

大都市近郊地域における環境NPOの成立と展開 — 有機循環システム構築をめざす愛知県豊明市を事例に —

松田輝子

国際社会文化学専攻・地域環境学コース2005年度修了

ごみ問題や循環型社会の形成に関連して、地域においてどのような実践が行われているか。このような私の興味関心にひきつけて、いくつかのフィールドに赴き出会ったのが、愛知県豊明市（名古屋市東隣、人口約6万8千人）における「有機循環都市」をめざす施策—家庭から排出される生ごみを堆肥化し、その堆肥を農地に還元して作物を育て、それを地域で流通させていこうとするもの—でした。

この環境施策は、行政・JA・NPOの3者が協働して行うことになっているのですが、実際に調査（インタビューやアンケート、参与観察、資料の分析）を進めていくと、施策の決定過程にNPOの意思が反映されにくい状況があることがわかりました。同時に、NPO活動を担う方々と、その多様で活発な活動にも関心をもつようになりました。そこで、NPOメンバーの方々の活動への参加や施策決定への参加など、参加に関わるNPOの課題について分析することにしました。それが私の修士論文です。

研究対象を決めてから、フィールドで得た「現実」をどのように切り取って記述すればよいかかわからず、非常に悩みました。しかし、改めて読み直した先行研究や先生のアドバイスによってパッと視野が開けたときは、爽快でした。また、調査を通してたくさんの方々に出会い話をお聞きすることができたことも、なにもにも代えがたい経験となりました。

私の博士論文

都市公園及び広域にわたる地域参加での自然環境再生手法に関する研究



阿波根あずさ

社会生活環境学専攻・生活環境計画学講座2005年度学位取得

私の研究テーマは過去に人間活動によって失われた自然環境を再生させる必要性を踏まえ、地域に存在する組織の連携により再生させる方法を明らかにする事が目的です。目標の設定や再生手法等の政策面の課題、地域の様々な主体（行政・NPO・住民他）の参加の方法など具体事例から分析を行いました。

調査は日本のみならず、同様の課題を抱え実践的に事業を実施してきた英国の事例も対象に現地調査を実施しました。実際に現場へ訪ねる事で自然環境再生による地域再生の成果を確認する事ができ、行政間やNPOとの情報の共有の仕方や管理の方法など、日本の事例について提言を行う上で十分に成果が得られました。

大学院では海外での調査や国際学会への参加など様々なチャンスをいただき、非常に恵まれた環境で研究に専念できた事に感謝しています。研究を進めていくにあたって、時には研究の意義について考えて停止してしまう事もありましたが、研究者としての自分のあり方を考え続けた時期であったと思います。指導教官から頂いた「博士課程では一つの高い山を登る事を目標に、今後はその山を増やしていく事」という言葉を胸に、今後はより広い視野で様々な経験を積んでいきたいと思っています。最後になりましたが、博士論文執筆にあたってご指導を賜りました多くの先生方に、この場を借りまして深くお礼申し上げます。



FD研修交流会「研究者と院生の対話」

西 英子 熊本県立大学環境共生学部講師

石田享子 博士後期課程人間環境科学専攻3 回生

阿波根あずさ 博士後期課程社会生活環境学専攻3 回生

藤平真紀子

人間文化研究科人間環境学専攻講師

2006年2月23日（木）13：30～15：30 生活環境学部中会議室。若手研究者1名から1時間、今期博士論文をまとめられた院生2名から各20分、非常にフレッシュな意見、話をしていただいた。研究を進めるなかで、指導教員や研究室の先輩や後輩から受ける影響とともに、家族からの支えも大きいこと、学外の研究会への参加や海外での調査を通じて、自分自身の考え方、生活や人のとらえ方が変わったこと、また、博士課程において論文投稿を計画的に進めていくのが望ましく、行き詰まった時こそ書き続けることが大切と伝えられた。留学に際し、受け入れ先の探し方や奨学金の受け方など、タイムスケジュールを重ねて紹介された。さらに、公募に関して、自分の研究のアピールの仕方を考えるとともに、教育についても問われることが多く、非常勤やTAの経験を生かせるという、講義のTAも経験してみたかったという意見が挙げられた。パネリスト以外の参加者は16名であり、そのうち本学学生・院生8名であった。



大学院生の自主企画研究セミナー1

未来の子どもの姿 —メディア社会の変容の中で—

石上浩美

博士後期課程社会生活環境学専攻

今回のセミナーは2006年2月19日（日）13：00～17：00、N棟文学部会議室で実施した。その目的は、講座として一貫した研究組織の活性化を図ること、学内外からの若手研究者や実践者を話題提供者として招き交流する場を形成すること、全体討議の中から「未来の子どもの姿」を描き、「大人社会がなすべきこと」を考える、の3点であった。多様な話題提供をもとに議論は白熱した。特に子どものリアリティ認識・育成というメディアリテラシー教育的な課題と、子育て支援方策上の課題では、大きな宿題を抱えたように感じている。今回はセミナーとしての形式を整えることはできたが、セミナーの企画・運営・内容には改善点が多々ある。ユビキダスネットワーク社会のありかたも含めて今後の課題としたい。なお、参加者数は本学教員3名、院生・学部生18名、学外12名、合計33名であった。



大学院生の自主企画研究セミナー2

日本・アメリカ・スウェーデン・オランダの家族生活
—生活経験者に学ぶ家族文化比較—

菊地真理

博士後期課程社会生活環境学専攻

本セミナーは、2006年2月23日（木曜）13：00よりE棟307教室にて、SAJ（ステップファミリー・アソシエーション・オブ・ジャパン）代表の吉本真紀氏を講師に迎え開催した。セミナー参加者は10名であり、内訳は学内9名・学外1名。学内9名のうち2名が前期課程院生、5名が後期課程院生、2名が教員であった。吉本氏は2001年よりSAJにて子連れ再婚当事者支援活動を行っているかたわら、22歳で渡米し就職・結婚・子育て・離婚を経験された。その後再婚とともにスウェーデン、オランダに移住されている。そこで、当事者支援活動における実践的な問題解決の手法とともに、異なる家族文化のなかで生活された経験談を吉本氏にうかがい、生活者の視点から各国の生の情報を学ぼうという趣旨で開催した。当日は、机上の学びでは得られない各国の政策や家族生活のありようについて議論が白熱し、終了時間が当初の予定よりも1時間延長した。

そのほかの 取り組み

■FD企画 大学院教育の改善・向上をめざす企画です

研究交流集会「うちの大学院」 2006年2月17日（金）14：00～16：00

他大学院に所属する院生・PDをお招きし、研究指導の実際について情報交換をしました。

FD研修会「研究者への道」 2006年2月20日（月）14：00～16：00

本学出身の若手研究者に、研究内容や研究者への道について語っていただきました。

■大学院生の自主企画研究セミナー 院生自ら企画運営する研究セミナーです
セミナー「現代社会への視点」 2006年2月27日（月）14：00～17：00 企画／村田賀依子ほか、本学大学院生

奥村 隆 立教大学社会学部教授 社会的なもの和社会学的なもの—『他者という技法』以後—

セミナー「環境政策と環境評価」 2005年12月27日（火）企画／水野和代ほか、本学大学院生
浅野耕太 京都大学人間・環境学研究所助教授